

---

# 月明かりを頼りに

コバヤシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月明かりを頼りに

### 【Nコード】

N7564I

### 【作者名】

コバヤシ

### 【あらすじ】

病弱な少女。満月の晩に少年はその少女を自殺から救った。しかしその少女には行くあてがない。とりあえず、少年は少女を1ヶ月だけ預かることに決めたのだが…

## 前書き（前書き）

初心者です。宜しくお願いいたします。

## 前書き

『10月12日。本日の天気予報です。午前中は降水確率80%、午後20%で午後6時頃から晴れ渡り、月を見ることが出来そうです。また、明後日の10月15日は中秋の名月となります。一年で一番の月を快くまで見てみてはどうでしょうか。それでは皆様、良い一日を。さようなら。』

俺の記憶に間違いがなければ、確かにそう言っていた

## プロローグ

『おはようございます。10月12日、今日の天気予報です。午前中は秋雨前線の影響により雨が降りますが午後には止み青空が見れるでしょう。また、この調子でいけば明後日の10月15日には中秋の名月となる満月が見れるでしょう。一年で一番の月を心行くまで見てみてはどうでしょうか？それでは皆様良い一日を。』

俺の記憶に間違いがなければ確かにそう言っていた。

## 第1話（前書き）

基本的に長くなってしまいますのでどうぞ時間のある時に見てくださいと宜しいかと思えます。

また、投稿する前に見直してはいるのですが誤字脱字があるかと思えます。その時にはご指摘を貰えるととても有り難いです。

拙い文章ですが、宜しくお願いします。

## 第1話

俺の朝は早い。

まず朝の5時に起床し夕べの残り物で朝食を作る。

次に冷凍食品で真心と愛情がこもった弁当を2つ作る。

1つは俺の。もう1つは中学1年生の妹の分だ。

次に昨日寝る前に洗濯機に放り込んだ洗濯物を取り出す。

取り出したら味噌汁を火にかけ、そのまま二階に上がり妹を起こす。

「朝だぞ〜。起きろ〜。」

「……………うーん……………」

ドアの向こうから弱々しい返事がかえってくる。

その後洗濯物を干したら、また二階に上がる。

ドンドンドン

「琴美く、起きろく。」

ドンドンドン

「こどもちゃん。あそびですよ。」

ガチャ

「…お兄ちゃんおはよ…」

壁に向かって話しかける妹

君のお兄ちゃんは壁か？

目をぼぼ閉じたまま階段を下りていく我が妹。

君は心眼が使えたのか…。

そのまま食卓につき、一緒に朝食をとる。

その後妹と一緒に顔を洗い制服に着替えたら、

「琴美弁当もったか？」

「もった。」

「ハンカチもったか？」

「もった。」

「教科書忘れてないか？」

「多分。」

「志織ちゃんと仲直りしたか？」

「……………まだ。」

「時間が経つと話しかけにくくなるから早めに仲直りしろよ?」

「頑張ってみる。じゃあ、行ってきます。」

「おう。行ってらっしゃい。」

そうして妹を見送る。

俺は高校の部活はやってないのでもう少しゆっくりしてから登校する。

いつもは新聞を読んでいると登校する時間になり、

「行ってきます。」

誰もいない静かな空間に向かって言い放ち俺は家を後にする。

そんなこんなで俺の朝は慌ただしく過ぎていく。

## 第2話

今日は10月12日。

朝から雨が降っていた。

10月だと言うのに外は秋の気配など微塵も見せずに今は冬並の寒さをまとっている。

無論、俺は秋と言う自然の表情が一番愛しく感じられる季節などに手袋は無縁だということは小さい頃からの常識であり、傘を持つために自然の驚異にさらされている右手は死んだように冷たい。

(……学生主夫をなめんじゃねーぞ……)

そんな強がりをしながら歩くこと10分、見えてくる建物がある。

俺が通っている四谷北高校である。

赤い屋根を乗せたおんぼろ校舎は何でも明治時代からの名門だとか  
何とか。

一応は進学校、らしい。

4月にこの高校に入学してからもう半年ほど経つ。

最近やっと学校生活に慣れてきた俺は、

(何だかあっという間だなあ…)

と感慨深くなってしまう。

このまま二年間あっという間に終わってしまうのだろうか？

そんな不安が胸を過る。

(かといって思いっきりエンジョイ出来る訳でもないしなあ…)

そう思いながら校舎を見上げる。

そう、俺には家庭がある。

それを放っておく訳にはいかない。

今や俺は琴美の保護者みたいなものだ。

(俺がしっかりするんだ…!!)

「…はあ。」

と思いつつもやはりため息が出てしまっ俺って…

下駄箱につくと、

「よっ、晃太！」

と無駄にハイテンションで声をかけられた。

見てみると同じクラスの真史が飛びつきりの笑顔で俺の方を見ている。

ジ

「な、何だよ晃太。俺の顔に何かついてるか？」

ジ

「だから何だっつてんだよ!？」

俺は真史から目を反らし、ため息をつく。

そしてまた真史の目を見て

「御愁傷様です。」

「殺すぞお前!？」

真史は何故かキレた。

### 第3話

「しかしどうしたんだ？浮かない顔して？」

「ちよつとな…」

下駄箱から教室までの道中、真史とそんな話をしながら階段を上がっていく。

この学校は一年生が三階、二年生が二階と言つように学年が下ほど階もそれに反比例して下がる。

そのため一年生は足腰が鍛えられてしょうがない。

「もしかしてまた琴美ちゃんか？」

「まあ…そうなんだけどさ…」

階数が上がる度に遠くなっていく校庭には、雨にも関わらずスポーツに打ち込む生徒がいた。

確かにこの間新人戦が終わったばかり、とテニス部である真史が言っていた。

(大会終わったばかりなのに…ご苦労様です。)

ちなみに真史はスポーツだけは万能なので地方大会を順調に勝ち進み、再来週に県大会を控えている。

いまいましい。

「何したんだ？」

「……………この間琴美を起こしに部屋に入ったら殴られた…。」

三階につくと一気に賑やかになる。

そりゃ受験を控える三年生や、受験生になるにあたって無理矢理に校外模試を受けさせられている二年生に比べれば、一年生は何ともまあ気楽なことが。

クラスは学年で六組まであり、俺は三組に配属された。

(三組が一番うるさいよ…)

そんな率直な感想を抱いてしまうほど、知っている声が廊下に響いている。

「まあ、琴美ちゃんも年頃の女の子だからなあ…」

「おにゃのこは分らん。」

「じゃあ聞いてみるか?」

「……………?誰に?」

そんな疑問の声を上げた俺を尻目に真史はクラスの扉を開ける。

その瞬間皆の雑談の嵐が俺の鼓膜を突き抜けそのまま脳に刺さる。

俺は皆より遅目に登校するので教室に入るとほとんど揃ってることが多い。

そんな中を真史は迷いなく歩いていく。

後ろに続く俺。

明らかに真史の席とは違う方向に歩いていく。

その先には、

「おはよう、永瀬さん。ちょっと聞いた事があるんだけど。」

クラスのアイドル永瀬さんがいた。

「おはよう、真史君、晃太君。聞きたいことって……なあに？」

いつもの特上の笑顔で挨拶を交わす愛くるしい彼女に真史は真顔で疑問をぶつけた。

「永瀬さんはやっぱり……」

一瞬の沈黙。

そして真史は言い放つ。

「寝てる時に男が入ってきたらどう思う!？」

「夜這いみたいに言ってんじゃないよ!」

何故か突っ込む俺がいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7564i/>

---

月明かりを頼りに

2011年1月27日11時34分発行